

<6月定例研究会の報告>

2019年6月15日(土)、当研究所で定例研究会を行いました。
研究会のテーマは、文の構成です。

午後5時から研究授業、午後5時30分から研究協議を行いました。

研究授業者	: 有村美恵子 (つばき教育研究所スタッフ)
対象児	: 特別支援学校 (肢体不自由) 小学5年生
テーマ	: 「文の構成」
学習内容	: 「助詞1つを用いた文の構成の学習」

I、指導経過

1、学習開始時の様子 (2014年10月～)

2014年10月から月1回指導を開始する。児童が集中できるように興味のあるものを多く用いて学習を進めた。その際、良く見ることができるよう教材の色や大きさ等に配慮した。間違えること、できないこと、わからないことがないように、特に留意し学習を進めている。2015年4月から月2回指導を行っている。学習方法を母親に伝え、母親が家庭学習を行っている。

2、学習経過

(1)基礎学習 (2014年10月～2016年3月)

①未測量の学習 (大きさ・長さ・高さ) ②同じの概念形成の学習 ③空間概念の形成の学習 ④操作性の学習

(2)文字学習 (2016年9月～)

①清音 ②濁音 ③半濁音 ④拗音 ⑤長音 ⑥拗長音 ⑦促音 ⑧カタカナ

※文字学習は単語構成の方法で行っている。6文字以上の拗長音、促音を含む単語は現在も学習中である。

カタカナはほぼ読めるようになった。カタカナの単語構成はまだ行っていない。

(3)文の構成の学習 (2018年4月～)

①動詞の概念形成 ②助詞1つを用いた文の構成 (単語と助詞で構成する)

※身近な生活に必要な動詞の概念形成の学習 (動作絵カードと実際の動作の対応、動詞カードと動作絵カードとの対応、動作絵カードと動詞カードとの学習) を行った後、助詞1つを用いた文の学習 (どうする文 助詞「を」) に入った。文の構成の学習を行うようになり、会話がとてもスムーズになってきている。書字は援助をしながら学習を進めている。

(4)数の学習 (2018年4月～)

①数える学習 (数え板を使う→タイルを数えながら箱に入れる→箱に入ったタイルを数えながら出す) ②並べたタイルを数えて数を言う (横・縦) ③言われた数だけタイルを取って置く (必要な数、余分な数) ④数字カードを見て同じ数のタイルを並べる ⑤数えたタイルと同じ数の数字カードを取る ⑥数唱表を用いて数詞を言う (1～100) ⑥量を数える (1対1対応)

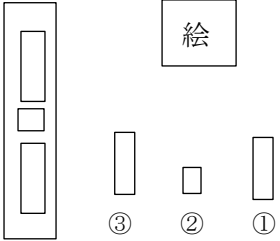

※援助をして数える学習を行っている。一人で数えたいという意思があり、少しの援助ですむように、使用する教材の大きさ、高さ等検討して呈示している。

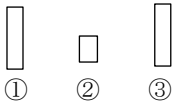
II、本時の学習

1、学習課題・ねらい・教材

学習課題	ねらい	教材
1, 文の構成	<ul style="list-style-type: none"> 動作絵カードを見て、文を言うことができる。 動作絵カードを見て、助詞1つを用いて文を構成することができる。 援助を受けながら、構成した文を書くことができる。 	文構成板、動作絵カード、名詞カード 助詞カード \square 、動詞カード 書字用紙 (1マス3.5cm×3.5cm) クリップボード、マジック
2, 数える学習	<ul style="list-style-type: none"> タイルを数えて、数を言うことができる。 	呈示板、タイル (2.5cm×2.5cm)

2、展開

学習項目	学習内容	留意点
1、挨拶	<ul style="list-style-type: none"> 「これからつばきのお勉強をはじめます。」と一緒に言う。 	
2、カレンダーで日付を確認	<ul style="list-style-type: none"> 「今日は、6月15日土曜日」と言い、カレンダーの15日の所を一緒に指さしをして確認する。お天気シールをはる。 	
3、文の構成 【1 試行目】 1対1 利き手側から呈示  (1) 動作絵カードの呈示 (2) 動作をする (3) 文を読む (4) 文節カードを1枚呈示し構成板に入れてから次の文節カードを呈示する。 (5) 構成した文を読む (6) 「おなじ」絵と文 (7) 書く (8) 書いた文を読む	<ul style="list-style-type: none"> 動作絵カードを呈示する。「これは、ようふくをたたむ」と言い指導者が洋服をたたむ。 児童も「ようふくをたたむ」と言い洋服をたたむ。 指導者が文構成板に、\square \square \square のカードを入れ、「ようふくを たたむ。」と読む。 文構成板を呈示し「“ようふくをたたむ”作るよ」と言う。 \squareのカードを呈示(左図①) 指さししながら一緒に読む。文構成板1番目の枠に入れる。 \squareのカードを呈示(左図②) 指さししながら一緒に読む。文構成板2番目の枠に入れる。 \squareのカードを呈示(左図③) 指さししながら一緒に読む。 文構成板の3番目の枠に入れる。 構成した文を指導者と一緒に読む。 動作絵カードを指さししながら「これはようふくをたたむ。」構成した文も指さしながら「これもようふくをたたむ。」動作絵カードと構成した文が同じことを確認する。 手本のカードを見て“ようふくをたたむ。”と一緒に書く。 書いた文を一緒に読む。 	<ul style="list-style-type: none"> 文節カードは1文字ずつ指さしをして、よく見て読むように伝える。 \squareのカードは1文字づつ指さしをして読んだ後、「“う”は長く伸ばす字だから、“ようふく”と読みます。」と伝え、一緒に言うように促す 頑張ったことを伝え、褒める。
4、数える学習  【1 試行目】 3 【2 試行目】 5	<ul style="list-style-type: none"> 呈示板にタイルを3個入れ呈示する。 指導者がタイルに指を触れながら、数詞を声にだして数える(模範) 児童がタイルに指を触れながら、数詞を声にだして数える。 「いくつですか？」の問いに、児童は「3」と答える。 	<ul style="list-style-type: none"> 指がタイルに止まらない時は援助をして、指と視線を止めるようにする。

<p>5、文の構成</p> <p>【2試行目】 反利き手側先出し</p>  <p>(1)動作絵カードの呈示 (2)文節カードを4枚呈示 (3)構成した文を読む (3)「おなじ」絵と文 (4)書く (5)書いた文を読む</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・動作絵カードを呈示し、「ようふくをたたむ」と一緒に言う ・文構成板を呈示する。 ・ようふくのカードを呈示（左図①）指さししながら一緒に読む。 ・をのカードを呈示（左図②）指さししながら一緒に読む。 ・たたむのカードを呈示（左図③）指さししながら一緒に読む。 ・文構成板1番の枠から文節カードを入れていく。 ・構成した文を指導者と一緒に読む。 ・動作絵カードと構成した文が同じことを確認する。 ・手本のカードを見て“ようふくをたたむ。”と一緒に書く。 ・書いた文と一緒に読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で書きたいと言った時は援助を減らす。 ・書かないと言った時は、指導者が書く。その時、書く文字を児童に言ってもらおう。
<p>6、挨拶</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「これでつばきのお勉強を終わりにします。」と一緒に言う 	

Ⅲ、研究協議

研究授業終了後、研究協議を行いました。特別支援学校の先生方、障害支援施設の職員の方、保護者の方の参加がありました。初めに授業者から補足説明を行い、その後質疑応答を行いました。

<授業者からの補足説明>

- ・「学習は楽しい！」と思えるように、児童の興味のある物を用いて学習を開始した。「わからない」「できない」「間違える」状況は、意欲が低下するばかりでなく、混乱を生じさせ、学習に苦手意識を持たせてしまう。現在も特にこの点に留意をして学習を進めている。
- ・本児の当研究所の学習は月2回のため、母親が家庭学習を行っている。母親との学習も「お母さんと一緒に学習は楽しい！」と児童が思えるように、特に配慮をして学習を進めてもらっている。
- ・学習当初は、発声が曖昧でありことばも覚えることが難しい様子がみられたが、文字学習が進み文字が読めるようになると、文字を読み自分の発声を修正できるようになってきている。現在は文構成の学習にも入り、自分の気持ちをことばで表現できるようになってきている。お友達との関係、先生との関係がとても豊かになってきている。

<参加された方の感想>

- ・集中して学習に取り組む様子がみえた。時々他のことに気持ちがそれてしまう場面も見られたが、指導者のことばかけや呈示でまた課題に取り組むことができた。とても意欲があるお子さんだと思った。指導者のことばかけのタイミングが大切だと感じた。
- ・書字が苦手だということだが、書字が好きになりはじめているのではないかと思った。援助されて書くことも少しずつできるようになってきている。児童も書くことができるようになり満足している様子が見られた。
- ・文を読む時、とても良く見て読んでいると思った。「ようふくを たたむ。」の長音の「ようふく」ということばも、きちんと伸ばして読むことができていた。指導者のことばを理解して学習を行っているのがよくわかった。
- ・指導者が「洋服をたたむ。」動作を児童に見せる時、児童側に洋服を向けて動作をする方が良いのではないかと思った。

<参加された方の質問>

- 書字の時、文字により援助の仕方が違っていた。どうして違うのか？

↓

手のコントロールが難しい所があるので、通常児童の手のブレを抑制するため少し手を添える援助を行っている。整った字を書くためには少し援助を行った方がいいのだが、「本人の一人で書きたい！」という気持ちを尊重して、簡単な字で一人で書けそうな時は一人で書いてもらっている。

また、ほとんどの文字がまだ下書きが必要であるが、一人で書ける文字も増えてきている。書字も実態に応じて①下書き（実線→点線）があるもの②始点と終点のみ印をつけたもの③始点のみ印をつけたもの④印がないものを使い分けて行っている。

- 「助詞の学習」を行っているが、日常生活の中で助詞を使い話すことは、以前と比べて増えてきたか？

↓

以前は単語のみで話をするが多かったが、最近は少しだが助詞を使って文で話す様子も見られるようになってきた。文で話すようになってきたので、何を伝えようとしているのかがわかりやすくなってきた。

<まとめ ～理事長宮城先生から～>

子どもが構成した文を読む時は、文を良く見て読むことが大切である。

また手本として指導者のみが読む時も、子どもは文をよく見ながら聞くことが大切である。

その時のことばかけは「よく聞いていてね。」ではなく、「よく見ていてね。」ということばかけが正しい。

“文をよく見て読むこと”これが文構成の学習で大切なことです。

次回の定例研究会は、10月5日（土）開催予定です。たくさんの方々のご参加をお待ちしています。